

機関誌「校正往來」の主筆者として、「校正の神様」と今日に伝説されてゐる人物である。異版もあろうかと考えたが、いまだに探ね当たらぬ。だが、この「神様」があまりあてにできないことがわかつてきた。大正十四年五月二十五日付で、叢文閣から非売品で、有島武郎全集「校正表」なる冊子が出されている。正誤七十八頁に及び、足助素一の「全集購読者に陳謝す」る文、十頁を付したものである。そこに神代種亮に校正を頼んだ経緯と、多忙のため校了まで引受けかねるといつて初校のみ校閲したことが記されている。有島が「旅する心」刊行の折、神代がその正誤表を贈ったことが機縁で、全集の校正依頼となつたものである。神代は「一回だけ通閲したのであるが、足助氏の病歿其の他で再校以後が不完全に畢つて、多大の誤植を作つたことは甚だ遺憾に思つてゐる」(「校正往來」第一冊、昭五・五)と弁じているが、著者による加筆があるわけではなかつたと思はれる。

「美術真説」は今日、どこまでフェノロサの真意を伝えてゐるのか、問題とされている。龍池会幹事の大森惟中による曲解もしくは歪曲はないのかという点である。それが「真説」たり得るかどうかは、講演の英文草稿と照合できれば解決する。三年陸前、NHKテレビの海外取材番組で、この草稿らしきものが、ハーバード大学のフォック美術館であつたか、ホートン・ライブラリーであつたかで見られたと報じていた。いずれ原文が紹介されるのを待ってと、暢気にかまえて意憤に過ごし今日に至つてしまつた。

四月に、目白から戸山のキャンパスに首任して、日々通勤の都度、当座に必要な文献資料とともに、再入手困難と思はれる書物や雑誌

類の一部を研究室に運び込むことにした。戦災直後に建てられた陋屋よりも、赤煉瓦の校舎の方が堅固でもあり、焼滅する恐れも無いと思はれたからである。ところが本屋の大きな紙袋を両手に提げて運んだはずのその書箱の中に、「美術真説」が無いのである。瀧貞電車の中で押し上げられてとび出てしまつたものか、とにかくあり得べき場所を何回となく探したが見出せない。それ程に大切とするものを、なぜ安直に運ぼうとしたものか、もつと心を用いて然るべきではなかつたのかと、今に後悔することしきりである。この三十年、多くの古書展、目録に接して来たが、「美術真説」が管見に入つたのは唯一度である。そのたつた一度の機会に、呼び込むように手に入れることができたのは、私の、対象への強い執着力の吸引によるものだらう。そして今、この小冊子は逃げるように姿を消してしまつた。かつてこれを得て、他人のレットルの信ずる能わざることを知つたが、今また、執着と心はせめて忘れれば、失うものの多いことをあらためて思い知らされたのである。何とはなく、佻しい話である。(昭五・十二・五記)

「源氏物語」雑感

第五回卒業 谷川 棗

一昨年のこと、大野晋先生のお名前に惹かれ、初めて学習院講座の源氏物語を聴講した。

当時高三の次男から、「しつかりノートをとつて、帰つてから話をしてよ」とはつぱをかけられ、昔の学生時代よりもはるかに真剣

学習院女子短期大学 国語国文学会 会報

12

昭和58年3月

〒162 東京都新宿区戸山三丁目二〇番二号

学習院女子短期大学国文学会研究室内

学習院女子短期大学

国語国文学会

電話 東京(03)3251195(代表)

振替 東京六二二六六五四

本が逃げる——『美術真説』のこと

高橋 新太郎

四半世紀以上も昔の事になるが、明治啓蒙期の文学芸術理論を跡づけようとして、西岡の「百學連環」やヴェロンの「維氏美學」などの基礎資料にあたったことがあった。文部省御雇教師の、フェノロサ氏演述、大森惟中筆記の『美術真説』もその一つであった。これは、明治文化研究会編輯の『明治文化全集第十二巻 文學藝術篇』(昭3・10、日本評論社)に複製収録され、戦後に版を重ねた。校訂者でもある神代種亮は、その解題に「實に『美術真説』は明治美術史に一期を劃する講演であつて、恰も文學史上に於ける『小説神髓』にも當るもの」とした。フェノロサは、明治の美術行政にも関わり、狩野芳崖を保護したように、賞徴した伝統的美術工芸を賑興した大恩人である。だが一方、内務官僚町田久成が「方今外人競テ採集巨金ヲ投シ候景況ニ付、本邦希世ノ珍宝モ終ニハ其所在ヲ不知様成行可申ハ必然ニシテ消歎ノ至ニ不堪候」と古器物物の伏失離散を憂

えた時代に、アメリカの日本文化財収集に大きく貢献した人物でもある。今日、ボストン美術館に収蔵されている「平治物語絵巻」をはじめ、円山応挙の「白狐図」尾形光琳の「松島屏風」雪舟の「花鳥屏風」伝秀文の「山水屏風」狩野元信の「白衣観音図」等々は、いずれもフェノロサ・コレクシヨンの逸品であり、フリーア美術館にも収蔵されている。『美術真説』は、文部卿福岡孝弟以下政府要人を招待して、上野の教育博物館で催された龍池会での講演筆記であり、徒らに西洋の画風を模倣するよりも、外国人の評価する「妙想」を備えた真の伝統絵画の特色を生かし、応用して、日本の美術工芸品を大いに海外に輸出すべしとする趣旨は、龍池会の意図した、外貨獲得のための美術工芸振興策に添ったものであった。その『美術真説』と題する六十頁の小冊子を、二十三年、四年前に神田の展覧会で、たしか五百円で入手した。波多野崧松堂の出品で、目録の記載に二カ所ばかり誤植があったのが幸いして、競争相手が少なかったためである。あるいは、無抽籤であつたのかもしれない。通行の『明治文化全集』の本文と対照したところ、細かな字句の異同は別にしても、六十五字分の脱落があるのに驚いた。神代種亮といえは、永井荷風・佐藤春夫をはじめ当代文人の信任厚く、日本校正協会を組織し、